

# 松本清張記念館

◆館報◆

2013.3  
第42号

## 「不弥国はここですよ」

### と、彼は私に眼下に展<sup>ひら</sup>けている 安心院<sup>あしんいん</sup>盆地<sup>ぼんち</sup>を示した。



『陸行水行』  
昭和39(1964)年9月  
ポケット文春

「陸行水行」は、  
昭和三十八(一九六三)年十月二十五日から  
翌年一月六日まで、  
連作「別冊黒い画集」の一篇として  
「週刊文春」に連載された。

現在入手できる本

- 『松本清張全集』第7巻 文藝春秋
- 『別冊黒い画集2 陸行水行』 文春文庫
- 『傑作短編集(六) 駅路』 新潮文庫
- 『松本清張小説セレクション23 黒い画集Ⅲ』 中央公論社

## 目次

- 松本清張研究会 第27回研究発表会…………… 2
- 特別企画展  
「昭和史発掘への招待」展を歩く…………… 5
- 展示品紹介…………… 6
- 点描 作品の舞台を訪ねて…………… 6
- 研究誌「松本清張研究」第十四号発刊…………… 7
- 友の会活動報告…………… 7
- トピックス…………… 8

## 作品紹介

古代史専門の万年講師である私(川田修一)は、東京から調査に訪れた大分県安心院町の妻垣神社で、浜中浩三という中年男に出会った。浜中は愛媛県吉野村役場の吏員で、『魏志倭人伝』の研究をしている郷土史家だという。

私は浜中から、『倭人伝』に書かれた邪馬台国までの行程と途中の国々の所在地に関する自説を聞かされるが、伊都国は福岡県朝倉村で、不弥国は安心院、投馬国は大分県臼杵、邪馬台国は宮崎県と鹿児島県の間あたりだとする、まったくの新説に興味を覚えた。

一ヶ月がたち、私は浜中が地方新聞に出した広告を眼にした。全国の郷土史家にむけて邪馬台国論を募集するものだった。半年がたった頃、浜中は「詐欺漢か、それとも篤学の士」かと西日本一帯の郷土史家から訊き合わせる手紙が届いた。浜中は私の名刺を出して近づきになり、論文集の出版を口実に金を預かったまま音沙汰がないらしい。

そして、臼杵の醤油醸造元の妻から手紙がきた。主人が五十万円もの大金を懐に、浜中と一緒に邪馬台国探しの旅に出たまま、戻らないので心配だとなる。やがて、魏使になりきって歩いていた二人の溺死体が、国東半島の先端の海岸で発見される。私の眼に、彼らが「水行十日、陸行一月」の邪馬台国をめざして、悠々と船を漕いでいる姿が浮かぶのであった。

松本清張(邪馬台国)論の発火点となった作品である。  
(学芸担当主任 中川里志)

講演

## 『或る「小倉日記」伝』と日本の近代文学

——「読むことを読む」——

講師 田中 実

○都留文科大学 名誉教授



### 「読む」とはどういう行為か

《八〇年代問題》の核心とは、研究対象の準拠枠の喪失です。「読むこと」の対象が何であるかが見えなくなり、何を讀んでいるかが分からないまま、文学作品の研究が進められています。わざと挑発的に言いますが、日本の文学研究の学会はどれもこれも「読むこと」の基本を違えています。

我々は『舞姫』や『こころ』をありのままに捉えることはできません。その人の捉えた『舞姫』の読みであり理解であり、かつして『舞姫』そのものを捉えることはでき

ません。しかし、客体そのものがなければ、我々の恣意的な読み自体がないのだから、客体そのものは捉えられないけど存在します。読書主体と客体の文章、その相関関係の二項の外部に、捉えられない客体そのものという第三項、〈原文〉⇨オリジナルセンテンスがあると考えます。そして、この〈原文〉⇨オリジナルセンテンスを根拠に、その〈影〉として読み手に現象する出来事を〈本文〉⇨パーソナルセンテンスと名付けます。「読むこと」はこの〈本文〉⇨パーソナルセンテンスを讀むのであり、これが僕たちの讀みの対象、「読むこと」の根拠、準拠枠です。すなわち、「読むことを読む」というのは「読む内容」ではなくて「讀んでいる行為」を讀むということです。つまり、「読む」とは読み手に現れた読み手の現象を讀み手自身が捉える行為なのです。

『或る「小倉日記」伝』では、田上耕作という三人称で主人公が登場してくる。三人称なら彼、語られている作中人物と、語る語り手との相関関係が、読み手の中に出てくるものとして現れている。我々が讀んでいるのはその出来事であって、客体そのものではない。

### 〈物語〉と〈小説〉を区別する

森鷗外の『舞姫』では、「余」という語り手が登場します。小説というのはだいたい出会うから別れまでの話、物語が中心になっ

ています。「或る「小倉日記」伝」では、田上耕作が「小倉日記」の鷗外の事跡を追跡しようとするところから、挫折するまでが物語の中心になっています。『舞姫』なら、田豊太郎という主人公がドイツに行つて、エリスという美貌の少女と出会つて別れる。身籠っている彼女は、豊太郎の友達の相沢謙吉という人物から事情を聞いて、驚いて発狂するという物語です。僕の讀みのポイントはこの〈物語〉と〈小説〉を区別するということです。

『舞姫』は豊太郎がこの悲劇的な物語を、船の中でノートに書くという形式になっています。しかし、日記は最後まで書けません。そして、痛みが沈静化したときに、やっぱり思い出すことは恋人のエリスのことで、それを書くわけです。そこで、一箇所だけお母さんの死のことが出てくるのが重要です。豊太郎は極端なマザコンです。母ひとり子ひとり、侍だったお父さんは早く死んで、太田家再興を遺言で息子に託した。しかし、豊太郎は免官になる。日本でそのことを知ったお母さんは諫死をします。息子を諫めるために死んだのです。豊太郎は母親を間接的に殺したことになる。母殺しですが、そのことは手記の中に書けないんです。自分の内部に起こっている、もつとも深く大きいことは、怖くて恐ろしくて書けない。「余」が自身の内奥に隠し持つ、決定的な出来事、死んだ母にどう向き合うのか、その認識の闇を抱えていることそれ自体が語れないからこそ、その上澄み、つまりもう一つの大事な点、自分と同棲し妊娠していた女性が発狂し、その女性を置き去りにして帰国することが語られます。読者はストーリー（物語）でこれを読んではしまう。そうすると、結局自分とは何か



の「自分探し」、「奥深くに潜りまじることの我」から抜け出せません。物語の最後は結局、相沢が本当のことを喋ったことが悪い、罪だ。つまり、相沢は良友だが、彼を憎んでしまっている豊太郎がいる、という上澄みの物語になっている。物語で讀むと、それで終わってしまう。〈小説〉は物語を語る（語り手）との相関を讀むのです。豊太郎とエリスの関係ではなく、両者の相関を語る語り手「余」の（語り）との相関を讀むのです。

### 鷗外の「子が立場」

鷗外の『鶏』という小説は明治三十二年、鷗外がいわゆる左遷という形で東京から小倉の第十二師団に遷る出来事を素材にしています。主人公の石田小介が六月二十四日小倉に入るところから、八月のお祭りの花



火を見ているところで話は終わる。「小倉日記」と重なる記述もたくさんあり、確かに明治三十二年の鷗外の出来事が描かれているので、ふつう、明治三十二年の出来事だと読んでしまうわけです。しかし本当は、明治四十二年の〈語り手〉が日露戦争後の日本の世界戦略の中で語っているのです。つまり、〈語り手〉は主人公の出来事の外部にたつて、これを相対化して捉えている、まさに近代小説です。石田という人物を日露戦争後の眼差しから見て、軍人として参謀としてどう考えるかが、実は鷗外にとつて、最後に「難なんぞ入らんと云へ」となる。なぜあんなに可愛がつっていた難をいららないというのか、分らない。

「予が立場」というエッセイの中で、鷗外は自分は田山君や島崎君のよりも文学が「旨くない」といわれてもちっとも困らな



い、お辞儀をしろといわれればお辞儀をするというふうには不平とか不満とかはないんだと言っただけ。「そしてそれは批評家の嫌ふ石田少介流とかの、何でもちいつと堪へてゐるなんぞと云ふのではありません。本当に平気なのです」と、批評家が石田はじいつと堪えている人物だと批判していると書いています。この批判は、「何事に対しても総て無為恬淡である様だが、その実何もかも呑込んで居る様な処がある。其処が不自然に思へる。之は神経質な人間を殊更に恬淡らしい性格の様に描いた為ではあるまいか。」というものです。が、自分はそのような人間ではないんだと鷗外は言っているわけです。近代文学の研究者でも、石田のことを我慢している人物と解釈している面がありますが、僕はそういうふうには読まないほうがいいと考えています。

つまり、石田は、平和な時代に戦場と同じような生き方をしていく人物です。戦時下の精神を平時に生きる男で、小倉の町に放縦に放たれる性の欲望や物欲とは距離をとつて、そこを別次元に生きています。自分は天皇と結びついている、あとのものは極力外していつて、やがて日露戦争がありますから、当時の日本が世界とどうわたりあうか、こういう問題が石田の問題だったのです。だから、周りの人から見るとけちで馬鹿に思われている。別当やお時ばあさんがこそ泥のようなことをしても、全然拘泥しない。そして、最後に可愛がついたはずの「難なんぞ入らんと云へ」と言うのも、特に石田は愛玩するものなぞ必要とせず、あつてもなくても平気だからなのです。しかし、石田は自分の内部にあるべき志、世界観があつて、その中でのみ生きていく。それと周りがいかに違うかということが、

鷗外が書きたかつたことであります。

### 鷗外の憤懣は松本清張の憤懣だった

松本清張は最初に『或る「小倉日記」伝』を書き、晩年に『両像 森鷗外』でもう一度鷗外の問題にぶつかつていった。『両像 森鷗外』を読んで一番私が心に残つたのは、結局鷗外は、「石見の人、森林太郎として死せんとす」という言葉で、初めて文学者になつたところと云うことです。この松本さんの評価は、僕はすごいなつて思いました。ああ、そうか、松本清張から見ると、鷗外は生きていくときは官僚の方に足を奪われているから、死ぬときに初めて文学者になつた、といふのかと。僕はそうは思いませんが、松本清張が鷗外をそういうふう切つたことには、強く松本清張という作家の総体がかかつていると思います。

鷗外の「予が立場」という文章に対して、松本清張は、「鷗外」という雑誌に「「かのやうに」について」というエッセイを寄せています。「私には、何んだか小倉に左遷された鷗外の憤懣が託されてゐるやうな気がします。かう考えると、鷗外のレジダネーションのなかには、ただの諦観とは違ふ、現秩序に対する激しい抵抗と怒りがひそんでゐるやうに、私にはいいよ思はれるのでございます。」と書いています。鷗外は「予が立場」の中で、「ちつとも不平がない。諸君と私を一緒に集めて、小学校のクラスの席順のやうに並ばせて、私に下座にすわつてお辞儀をしると云ふことなら、私は平気でお辞儀をするでせう。」という。松本さんはこの平気の中に、「現秩序に対する激しい抵抗と怒りがひそんでゐる」と読まれる。松本さんは、鷗外は本当は平気じゃないと

言っているのだが、間違えてはいけないのは、鷗外も石田少佐も人生に「不満」はないのです。清張も不満があると書いているのではなく、鷗外の中には、マグマのような怒りがある、現秩序に対する抵抗があるとおっしゃっているのだと思います。清張のいう「憤懣」がみなぎっているのです。

このことは、松本清張の生き方に関わつてくる問題です。清張は鷗外についても一つ、「鷗外の暗示」で、「一体、推理小説とは、何であろうか。その前に「探偵小説」は文学になり得るか。非文学的運命のものか、という有名な論争がある。探偵小説が、単なる犯人と探偵との智慧くらべであつたり、謎と謎だけのゲームを使命とするのであつたら、絶対に文学とはいえないであろう。(中略)文学とは、人生の何かが書かれていなければならぬのである。(中略)人間像が美事に描き切れれば、も早、いわゆる純文学も推理小説も区別が無いであろう。少なくとも、愚にもつかぬ身辺雑記の類の私小説よりは、ずっと文学である」と書いています。清張にとつてみれば、推理小説とか純文学とか、「昭和史発掘」や「古代探求」とかの区別は仮のもので、どれでも人生の何かが書かれていることが大事なのです。四十代から八十二歳まで、脳溢血で倒れる寸前まで書き続けた松本清張を向こうにおいて、こういう文章を読むと、鷗外は平気だと言つておきながら、平気じゃないと言つたことの意味が、とても興味深い関心事になります。つまり、松本清張が言っている鷗外の「憤懣」は、まさに松本清張の憤懣だつたに違いない。清張自身にこの「憤懣」があるからこそ、鷗外の隠された心情を斟酌することができるのです。鷗外にも清張にもマグマのごとき「憤懣」、怒りがあるのです。これは『或る「小

倉日記「伝」の田上耕作にも通じる世界です。この場に立たないと、「或る「小倉日記」伝」の真価は見えてきません。

『舞姫』で、豊太郎は船で日本に帰るとき眼に見るもの、耳に聞えるものは、みんな虚偽だということが分ってしまったんです。だから、日記も書かないんです。書くことに意味がないから、書けないんです。そして、書き出したノートも、これが虚偽であると豊太郎にはよく分っていて、母親が自分のために死んだという恐ろしい問題は避けて、上澄みだけ書いていく。だから、問題の本質からぐーんと離れて、親友を憎むというようなことで終わる。いかにそれが、豊太郎自身の内面に深く突き刺さらないか分りながら、そう書いていくんです。鷗外にとつてこれが、語るとか書くとかいうことは虚偽であるという問題に対応する仕方だったわけです。語ることがいかに虚偽であるか、つまり鷗外流にいうと「自己弁護」であるか。生きることはそういう「自己弁護」から抜けることはできない。この「自己弁護」の虚偽に対してどう文学として戦うか、これが鷗外文学なのです。鷗外はこの問題とずつと戦い続けて、そして、例の死に方をする。

こういうことを現代作家たちはどう考えているか。川上弘美や村上春樹はこの世の世界ともう一つ向こう側の世界、複数の世界を書いている。つまり、自分探しのような文学が泥沼に陥ってしまう、そういう私探しの蟻地獄をはるかに抜けて、世界の複数が問題になってくる。その蟻地獄のような世界を、最初に『舞姫』を書くときから鷗外は意識していて、「まことの我」というものではなく結局捉えられない問題のところ、主人公をおいて書いていく。そこでは、

自分の内側にあるものを書いたって、虚偽にしかならない。そういう鷗外の始まりの問題の核心を、松本清張はやはりこの「予が立場」で見ている、鷗外がもう一方で官僚として生き続けた部分を全部排除した。それは松本清張が、たぎるような憤懣を持っていたからだと思えます。

記念館で聞いて耳に残っている言葉があります。「疑ってかかる」「展示室で清張が言っている言葉です。眼に見えるものは、耳に聞えるものは、みんな「疑ってかかる」ということです。松本清張には世界は客体そのものではないという直感が当初からあって、清張という作家の全存在が世界を疑ってかかる主体を生きざるを得なかったのでしょう。村上春樹や川上弘美のようなパラレルワールドの繰り広げられる世界認識とは違って、おそらく事件の現場を足で書く、その尽きることのない好奇心は隠れているものを暴く、五官で知覚できるものをすべて疑ってかかる本能は、現代作家と実は通底しているように思われます。

剥ぎとることが人生の真実に関わっていく、あるいは繋がっていく、ということでもありましょう。では、どう剥ぎとっていくか。文学は剥ぎとつたものが詩でなければいけない。これは、大佛次郎が最初に松本清張に注意したことでありました。『西郷札』には詩が足りないんだよ、と。『西郷札』から『或る「小倉日記」伝』へ移るときに、それを松本清張は的確に受けとめた。

### 松本清張は田上耕作にむかって成熟した

僕からみると、松本清張はまさに『或る「小倉日記」伝』の田上耕作に向って成熟したように思います。耕作が死んだ後に「小

倉日記」のオリジナルが森家から出てくる。で、語り手は「不幸か幸福かわからない。」と語り終わるので、耕作の人生の終りが美しく語られているだけでなく、不幸かというレベルを超えて、そうした世俗の評価と関わりない、それとは別の耕作の人生の在り方を「真実」として語り、描き出している。語り手は田上耕作と一つになっている。語り手は語られている対象との間に距離をとってどう批評するか、これが『近代小説』だと申しましたけれども、『或る「小倉日記」伝』の語り手は田上耕作と一つになって、伝便の鈴の音を末期の耳に聞かせ、幼児のときの伝便屋の孫娘との全福の解放の中に柔らかく包み込んでいく。耕作の仕事は世俗では評価されなかったかもしれないけど、風呂敷いっぱいの草稿が彼の遺骨とともに母親に抱かれていく世界こそ、松本清張が真に目指したものであった。そこに怒りや志が田上耕作に形で現れている。

松本清張は、鷗外は死後初めて「文学者」であることを宣言したと批評をしなければならなかった。これははつきり激しい鷗外批判、〈憤懣〉です。その松本清張の憤懣というか、マゲマというようなものは、この世の何ものでも満たされない。鷗外に比べて、耕作こそ「或る小倉日記」の書き手として生を全うした、純粹に文学の人だった、と清張はこれを評価したに違いありません。つまり、田上耕作の生き方、あるいは死に方を是としていく、それを自分の生涯の目標としていく生き方は、この世のものを超えていこうとしていると言えます。これが「詩が足りない」という大佛次郎に対しての松本清張の答え方であったし、以後、四十年間、生の限り、松本清張はこの作品に向かって成熟したように思います。

### 研究発表

講師 南 富鎮  
○静岡大学 教授

## 松本清張と丸山眞男



※本発表の内容は本年三月末発行予定の「松本清張研究」第十四号に掲載の論文で読むことができます。

### 研究発表

講師 コルベイ ステイブ  
○静岡大学 専任講師

## 世界的作家・松本清張

——ミステリー小説の  
映画化について





# 「昭和史発掘への招待」展を歩く

キヨシとハルコの探検! 清張記念館 番外編



ハルコ 久しぶりの記念館ね♪

キヨシ 実は「昭和史発掘」ちゃんと読んでいないんだ…難しいので…。

ハルコ 今回の企画展は「皆に『昭和史発掘』に関心を持ってもらえるように」と考えられたんですって。読んでいなくても大丈夫よ。



「前号の館報の年表を参考にするよ!」  
「あら、準備万端ね!」



## I 「昭和史発掘」の世界



← 菊池寛賞の時計

「普段は再現家屋にあるけど、今回こんなに近くで見られるなんて!」

キヨシ 8年近くも連載されたんだ。改めて大作だなあと実感するよ。ゲラへの書き込みも細かくて、清張さんの熱意を感じるね。

ハルコ 原稿の字も丁寧ね。吉川英治文学賞と菊池寛賞を受賞しているけど、どちらも授賞理由に「昭和史発掘」が挙がっているのね。まだ連載は完了していないけど、先輩作家に高く評価されているのね、「作家と史家の融合」ですって。(写真をみながら)この授賞式の清張さん、本当に嬉しそうね。



## II 「昭和史発掘」への誘い

キヨシ いよいよ内容だね…ぼくちょっとアレルギー…あれ、「昭和史発掘」って、最初は大正時代からはじまるんだ。

ハルコ そうね、昭和11年の2・26事件までの日本が、様々な角度から描かれているのよ。

キヨシ 「芥川龍之介の死」なんていうのもあるんだ。

ハルコ 芥川は若い頃愛読したというものね。あら、これが取り寄せたという芥川の写真ね。

キヨシ 昔の新聞もあるね。朴烈と金子文子の怪写真、これが問題になったなんて、どうして?

ハルコ それは読んでのお楽しみ。当時の資料は「昭和史」を身近に感じさせるわね。

キヨシ 最初的小林多喜二全集だ、うわあ、伏せ字って初めて見たよ。



「まあつ作中に登場する「廉軍二閣入ル意見書」だわ!」

## III 復元 昭和史発掘

キヨシ これはなんだろう…(バラバラ)… あっ! 連載当時の誌面だ!

ハルコ 単行本とは雰囲気が違うわね。あら、谷崎潤一郎はちょうど「潤一郎と春夫」執筆中に亡くなったのね、清張さんがひとこと書いているわ。

キヨシ そうか、見出しも毎回違うんだね、面白いなあ。欲しいなあ。

ハルコ 残念だけど会場でしか読めないようね。あら、キヨシくん「昭和史発掘」に興味が湧いてきた?

キヨシ うん、長くて難しそうと思っていたけど、すこしずつ読んでみたいなあ。

ハルコ 私ももう一度読み直そうと。



「挿画があつて親しみやすいなあ」「イメージしやすいわね!」

「昭和史発掘への招待」展は、  
地階企画展示室で開催中。  
5月6日(月)まで延長します。

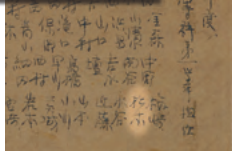


(図録: 800円)

# 尋常高等小学校の写真



一列目右から  
二人目が清張



「今では「尋常高等小学校」といってもぴんと来る人は少ないだろう。松本清張の頃の小学校は、尋常小学校が六年間、その上に高等小学校が二年間あった。

「学歴の克服」というエッセイに清張は、次のように書いている。

私は貧乏の中に育ったが、家は赤貧洗うが如しというほどではない。両親は小さな餅屋をしていたが、のちに飲食店を営んだ。しかし、上級の学校に進学させてくれる余裕はなかった。(中略)

小学校を出ると、中学校に進学出来ない者は高等科に入る。だから、この辺から差別感が生じてくる。

極貧のイメージが強い清張の生い立ちだが、実際は「赤貧洗うが如し」というほどではなかった。当時は、中学校進学率は一割にも満たず、高等小学校へ行かない子供もかなりいた。清張の家庭だけが、貧しいわけではなかった。

明治末から昭和初期のことで、清張の幼少期の写真が多いはずもない。それでも、生後二カ月、約半年後、二歳の頃と、写真館で撮った写真が三枚も残っている。特に最後の、父

が二歳の清張を抱いて撮った写真は、暗れ着を纏った立派なものだ。写真の台紙には「下関・吉田」とある。(全盛の頃には絹物づくめで恰幅があった(「半生の記」という、父・峯太郎のいちばん景気が良かった時期だろうか。)

記念館の開館当初は、この三枚の次に登場するのが十六歳の給仕時代の写真だった。二〇〇〇年、大正期の小倉と清張を取り上げた企画展で、清張が写っているはずの天神島小学校の集合写真を紹介した。しかし、どれが清張少年だか分からない——情報提供を募ったが、確定することはできなかった。その後、「板櫃尋常高等小学校で松本清張を教えた」という教師が保管していた写真が見つかった。この集合写真は、大正十一年の学制發布五十周年記念に撮影されたもの。台紙の裏面には生徒全員の名字が記され、最前列右から二人目に「松本」とある。年代や校長名などから、これが清張であると特定できた。

強く口を結びこちらを見つめる十四歳頃の清張。進学のを押し殺し、読書で心を慰めたのだろう。高等小学校卒という学歴は、羽ばたこうとする清張を度々傷つけ、苦しめた。しかし、清張は「学歴の克服」をこう締めくくる。

羨望することも卑下することも無い。上級学校を出た途端に勉強をストップする者と、小中学校を出てから一生を勉強して通すものと、どちらに最終の勝敗があるだろう。再度云うならば、人生には卒業学校名の記入欄はないのである。(専門学芸員 柳原暁子)

## 「天城越え」 5

「『黒い画集』を終わって」(松本清張全集4)

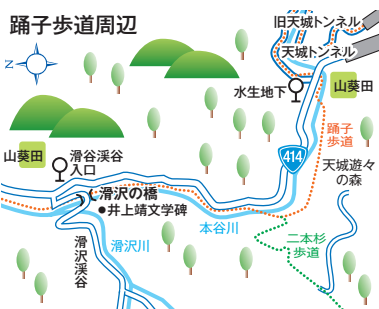
黒い画集「所収」によれば、小説「天城越え」の(材料は実際の「静岡県刑事資料」から採った)という。これは、静岡県警察部保安課「刑事警察参考資料第四輯」(大正十一年六月二十五日発行の「五、天城山に於ける土工殺し事件」のことと思われる。資料によると、犯人は当時十五歳、(棒編の単衣物を着て傘と麻裏草履を持ち)はだしで(金十六銭を帯に包み)、下田街道を天城山に向かった。調書によると、天城山の峠の隧道から湯ヶ島の方へ向かって下りていったが(家へ帰って御詫びをしよう)途中で逆戻りした。午後八時頃県道の左側に山葵沢がある少し手前で土工と一緒にになり、所持金を使い果たしていたので(二度も三度も金の無心)をしたが得られず、(私)は懐にしていた切出しで斬り付けた。荷物を白橋付近まで持って行き投棄した後、(製氷所の氷庫に一夜を明かし)翌日帰宅した。

下は本谷川と滑沢川の合流点近くの滑沢渓谷に架かる昭和四十六年三月竣工の現在の橋の写真である。男の死体は、十三日後、裸体のまま、この場所にあった土橋の橋杭に掛かっていた。この付近には井上靖文学碑もある。

少年が憧れる大塚ハナモデルとなる酌婦は、この「刑事資料」に登場しない。酌婦のルーツは、田中絹代主演の松竹映画「恋の花咲く伊豆の踊子」(原作は川端康成の「伊豆の踊子」。監督・五所平之助、昭和八年二月二日封切)ではないかと思う。



「滑沢の橋」



映画の冒頭に自転車に乗った巡査が登場するが、彼は湯ヶ島にあると思われる「湯川楼」の内芸者が逃亡したのを探しており、踊子一行に、「二十五六の芸者風の女」に出会わなかったか訪ねる。劇中最後まで女は姿を表さないが、道路工事の土工二人の会話では修善寺の方に逃げたようである。大塚ハナの目撃情報は「二十四五の女」となっており、映画の逃亡芸者とはほぼ一致する。「伊豆の踊子」と「天城越え」の原作の対比だけでは見えてこない発見だった。また、(トンネルを通り抜け)てから殺したというのがハナの自供だが、実際の事件現場は、トンネルから湯ヶ島方面に二キロメートルほど下った「トンネル下の山葵沢近く」(松本清張全集版による)ということになる。

昭和八年の封切当時、清張は小倉に住んでおり、ここでこの映画を観たのではないかと思う。清張と田中絹代は同年生まれの二十三歳だった。映画の逃亡芸者がその後どうなったか、清張は気になっていたのかも知れない。(終)

(西本 衛)



# 研究誌『松本清張研究』第十四号発刊



特集テーマは「初期短編小説」です。清張は「点と線」などの社会派推理小説で一躍人気を博しますが、今号ではそれより前に発表した、数多くのすぐれた短編に着目しました。また、中国・韓国・台湾・シンガポールと、アジア各地の研究者による清張文学研究の現在もご紹介いたします。論文のほか、座談会、多彩なエッセイから、清張作品の魅力をも多面的にお楽しみください。

## 特集 初期短編小説 —— 巨大な清張文学の母胎

対談 拜啓、清張先生 —— 清張作品の魅力再発見 ..... 北村 薫・宮部みゆき

松本清張の作家としての出発 —— 初期作品の可能性の射程 ..... 小森陽一  
 〈士族〉の矜持 —— 松本清張「啾々吟」論 ..... 石川 巧

「或る」小倉日記「伝」と強者の論理 —— モデルの扱い方を起点として ..... 大井田義彰

松本清張の初期小説と自伝的要素 ..... 松本常彦  
 初期作品に見る敗れゆく者たち ..... 川本三郎

エッセイ 清張の言うクリスティの「砂袋」とは ..... 数藤康雄  
 『鬼畜』の利一を想う ..... 郷田マモラ

やはり救済者、清張 ..... 島田荘司

## 特集 国際共同研究 東アジアにおける松本清張作品の受容

魯迅「故郷」と松本清張における「父系の指」から「張込み」への展開 ..... 藤井省三  
 松本清張と丸山眞男の朝鮮 ..... 南富 鎮

清張ミス터리と中国 映像メディアの力 ..... 王 成  
 『種族同盟』から『黒の奔流』への逆転 —— 清張文学の女性像をめぐって ..... 于桂 玲

メディア、流文学とテレビ・受容 ..... 関 詩 珮  
 —— 香港一九八〇年代における松本清張翻訳ブーム

「歪んだ複写」——一九八〇年代台湾における松本清張の翻訳と受容 ..... 陳 國 偉

## 記念館研究ノート

松本清張「駅路」論 —— サマセット・モームを手がかりに ..... 柳原暁子

# 友の会 活動報告

## ● 清張サロン

清張サロンは毎回、清張作品や清張に関する話題をテーマに、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流を目的に年8回開催されています。昨年11月から2月にかけては、下記のとおり3回開催されました。第3回は、友の会と記念館の共催とし、会員のほか、一般市民にも参加を呼びかけて行われました。いずれも参加者の皆様により深く清張作品に触れて楽しんで頂くことができ、充実したサロンとなりました。

第3回 11月30日(金) 14:00~16:00 参加者92名

- 会 場 記念館 企画展示室
- 特別講演会 テーマ 「松本清張と三島由紀夫 ～二人の作家の関係について考える～」
- 講 師 久保田 裕子氏(福岡教育大学教授)

第4回 1月25日(金) 14:00~16:00 参加者19名

- 会 場 記念館 会議室
- テーマ 「歪んだ複写」斜め読み
- 講 師 岩本 隆志氏(友の会監事)

第5回 2月22日(金) 14:00~16:15 参加者31名

- 会 場 記念館 地階ホール
- テーマ 特別企画展「昭和史発掘への招待」について
- 講 師 小野 芳美氏(記念館専門学芸員)

## ● 生誕祭

12月12日(水) 参加者56名  
 記念館 企画展示室

松本清張さんの103回目の誕生日を友の会会員でお祝いする「生誕祭」が開催されました。会員からの要望を受けて特別講演(卓話)が行われ、清張さんと家族ぐるみで親交のあった小野昭治様(友の会副会長)に「清張と小野家の人々」との思い出や、松本清張記念館の建設誘致の際の裏話などもユーモアを交えて語って頂きました。会員同士の交流もあり、ケーキやコーヒーを頂きながら始終明るく賑やかな雰囲気で行われました。



## ● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで  
**TEL. 093-582-2761**

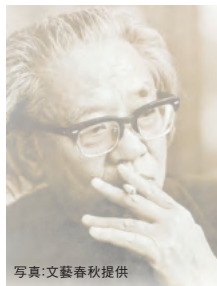
平成25年度  
中学生・高校生読書感想文  
コンクール

写真:文藝春秋提供

清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の心・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「ゼロの焦点」(『ゼロの焦点』新潮文庫)

「左の腕」

(『佐渡流人行』新潮文庫、『遠くからの声』光文社文庫、  
『遠くからの声』カッパ・ノベルス)

「陸行水行」(『陸行水行』文春文庫、『駅路』新潮文庫)

■応募方法

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■応募締切 平成25年10月31日(木) ※当日消印有効

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区内2番3号  
松本清張記念館 感想文コンクール係  
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、12月下旬頃、本人と学校に通知し表彰式を行います。

なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人)

《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具など(未定)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)

図書カード その他

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。

●主催 北九州市 ●主管 北九州市立松本清張記念館

●協力 モンブランジャパン



イラスト:山藤 章二

編集・発行

## 松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区内2番3号  
TEL 093 (582) 2761  
FAX 093 (562) 2303  
http://www.kid.ne.jp/seicho  
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
小倉からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)  
車: 北九州市立中央図書館 勝山公園 ホテルクラウンパレス小倉

## 第16回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動  
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)  
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。
- 内容 入選者(団体)に150万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成26年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

## 2012年度・ドラマ化された清張作品

2012.4.3(火)	「市長死す」	Fジテレビ
2012.6.23(土)	「波の塔」	テレビ朝日
2012.9.30(日)	「危険な斜面」	Fジテレビ
2012.11.9(金)	「疑惑」	Fジテレビ
2012.12.12(水)	「事故～黒い西集～」	テレビ東京
2012.12.15(土)	「十万分の一の偶然」	テレビ朝日
2012.12.22(土)	「熱い空気」	テレビ朝日
2013.1.14(月)	「寒流」	TBS

特別企画展「昭和史発掘への招待」  
オープニング式典

平成25年1月19日(土)、記念館友の会会長・小林慎也氏、市民文化スポーツ局文化スポーツ部長・高尾修、館長・藤井康栄によるテープカットが行われました。



- 編集後記 今号で点描「天城越え」は完結です。静岡県「刑事警察参考資料第四輯」は、国立国会図書館近代デジタルライブラリーを参照させていただきました。実際の事件は大正10年6月28日夜のことですが、「天城越え」では5年先のこととなっています。これは、あえて「伊豆の踊子」が書かれた年のこととしたものと思います。(西本 衛)

